HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	モンタナ日記
Author(s)	大舘, 智志
Citation	新ひぐま通信 別冊 : 第7回国際クマ会議報告書, 38-44
Issue Date	1986-08-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91582
Type	report
File Information	kikou_ohdachi.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第7回国際クマ会議報告書：38－44（1986）

モンタナ日記

大　舘　智　志

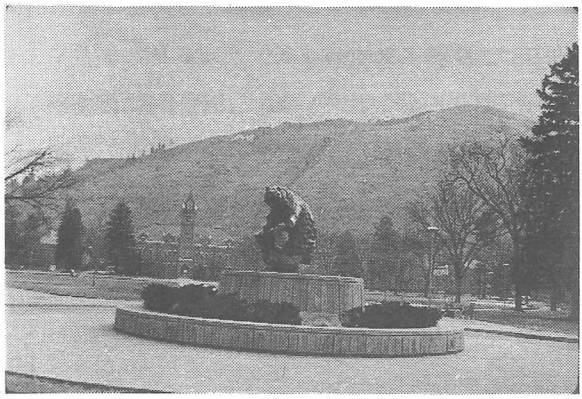
クマ会議閉会後、モンタナ大学のC. Jonkel氏を尋ね、野生動物の生息地や野生生物関係の公的機関等に案内していただいたので、その時の模様について述べたい。

2月30日。首都ワシントンの観光を楽しんでいた私と太田は、モンタナへ向うための航空券を得るためにユナイテッド航空の営業所へ赴いた。我々はこの後、ニューヨークの観光を控えており、ニューヨークからモンタナ州のミズーラまでの航空券が欲しかった。ところがユナイテッドの航空ルートを知らなかったので、係員の女性に尋ねたのだが、英会話ならぬ英怪話しかできない我々は説明に窮した。一時間ぐらい身振りや筆談を混じえて説明をした後、ようやく航空券を手に入れた。結局、ニューヨークからミズーラまでの直行便はなく、デンバー経由でモンタナ州のビリングスという街へ飛ぶことになった。

3月2日。ニューヨークから、小型ジェット機で飛び立った我々はビリングスに着いた。ここから我々はグレイハウンドのバスでミズーラまで行く予定であったが、バス・ディーポまで行く道が分からなかった。そこで、インフォメーションのお嬢さんに聞くと、だいぶ遠いと言う。しかも、ビリングスについた頃は、すっかり夜になっていたのでタクシーもおらず、二人は途方に暮れた。折しも、アメリカもここまで深く入ると住民のほとんどがアングロサクソン系であり、人種的圧迫感を感じていたのでますます不安は募るばかりだった。すると、同じ飛行機で着いたらしい初老の男性が、オロオロしているこの二人の東洋人を見るに見かねて、「どうしたのですか。私は、息子が車で迎えに来るのを待っています。グレイハウンドのバス・ディーポへ行くのだったら、連れていってあげましょう。」と助け舟を出してくれた。我々は彼の好意に甘えることにした。よく「アメリカ人は皆、自己中心主義者で、アカの他人のことなどはどうでもかまわない。」との声を聞くことがある。確かに、ニューヨークやワシントンなどの大都市では、そのような印象を受けたが、このような田舎の小さな町では一般論にはあてはまらないようだ。やがて、彼の息子が現われ、我々は車に乗せてもらった。車中、彼と話をしたところ彼は昔、軍隊で札幌に行ったことがあったという。アメリカの、こんな田舎に来て、まさか札幌の事を知っている人に出会うなどとは夢にも思わなかった。しばらく札幌のことなどについて話していると、バス・ディーポに到着した。ところが、バス・ディーポに着いたのはいいのだが、なんと、翌日の早朝まで、ミズーラ行きのバスはなかったのだ。宿を捜そうにも、もう夜中だ。すると、その男性が、嫌な顔もせず、ホテルを捜し出してくれた。そこは、極安のホテルであり、今にも南京虫やネズミが出てきそうなところであった。彼は、我々の身なりを見て、お金がないことを判断し、極安のこの

ホテルを紹介してくれたのだろう。正直言って、こんな安ホテルを捜してくれるとは思わなかった。なんという気くばりのよい紳士であろうか。そのようなわけで、私と太田は、今夜、そのホテルに泊ることになった。ただ一つのベッドに、Tシャツとパンツ姿で一緒に寝るハメになったので、早くお互いの存在を忘れようと、やっ気になって寝た。

3月3日。日本ならひな祭りであるが、今はそんなことはどうでもよい。この日は、早朝（3時半くらいだったか）に起き、お互いに昨晩は何かしなかったかと疑いつつ身仕度を整え、すぐ裏にあるバス・ディーポへ行った。バスが出発すると、折角の景色もろくろく見ず、バスの中で寝てしまった。



モンタナ大学キャンパス。ブロンズ像は、モンタナ大学運動部のシンボルのグリズリー（ハイイログマ）で、後ろの山にはモンタナ大学のイニシャル“M”が見える。

12時半ごろ、我々を乗せたバスはミズーラに到着した。ミズーラは想像していたよりも田舎で、何もない町であった。ミズーラについたら電話をくれとC．Jonkel氏に言われていたので、すかさず電話を掛けたが通話中であった。バス・ディーポからモンタナ大学までは結構遠いのだが、歩いていけない距離ではない。そこで、ここで待っているよりは歩いて行こうではないかということになった。しかし歩いてみると、荷物は重く、思ったよりは時間が掛りそうであった。二人で登山用ザックを背負いトボトボと歩道を歩いていくと、バンに乗ったお兄さんが横に止まり、「どこに行くんだい。」と尋ねてきた。モンタナ大学のC．Jonkel氏のところに行きたいと言ったら彼は「オー・ミスター・グリズリー！」といい、喜んでJonkel氏のところまで連れていってくれた。どうやらJonkel氏は田舎の名士の一人らしい。

我々が到着するとJonkel氏は、まず我々の宿舎となるドミトリー（寮）に案内してくれた。部屋は二人部屋で、昨日のホテルとは比べものにならない程いい部屋であった。しかも嬉しいことに、一日の宿泊費が7ドルと、とても割安だった。荷物を整理し終えると、Jonkel氏に、これから自分の受け持ちの講義があるので、出席してみないかと誘われた。アメリカの大学の講義はどういうものかを知る良い機会だったので二つ返事で受けた。講義は、林学の学生を対象としたもので、数人の講師が担当し、それぞれ2，30分の持ち時間がある。Jonkel氏はクマについて話し、特に我々がきていることを意識してか、アジアにもヒグマとクロクマが生息していることについても説明された。学生にしてみれば、アジアにもクマが居るということを聞いたのは、初めてとまではいかないが、興味深い情報だったようだ。

このあと、夜になってから、青井さんとクマ牧場の前田さんがミズーラに到着した。北海道からの訪問者がそろったところで、Jonkel 氏らと街の小さなバーでビールを飲みつつ、明日以降の予定について話した。

3月4日。この日は、ナショナル・バイソン・レンジ（バイソンやシカ類の保護区）に出掛けることになった。しかし、C. Jonkel 氏は4日から5日まで、ミネソタに講義にいかれるということだったので、かわって、息子のJ. Jonkel 氏が我々を案内してくれた。一行は、当日、ミズーラに到着した羽澄夫妻（野生動物保護管理事務所）を含め6名であった（太田は気分がすぐれないためキャンセル）。6名がスバル・レオーネに乗り込み、とても窮屈であったが、途中、ロッキー山脈などすばらしい景観を眺めながらの新鮮な旅であった。ところで、ミズーラ周辺の低い山（といっても海抜は2000ｍくらいはある）では、山の斜面によって木が生えてないところと生えているところが明確に分かれている。これは Rain Shadow（雨の影）という現象のためだそうで、雨雲がある山を越えるまでに、全て雨として降ってしまい、その山の反対側の斜面が乾燥して木が成育しないのだ。いわゆる、局地的なフェーン現象のようなものであろう。

Rain shadow のある山。黒っぽい部分が高木の生えているところで、白っぽい部分が草地となっているところである。

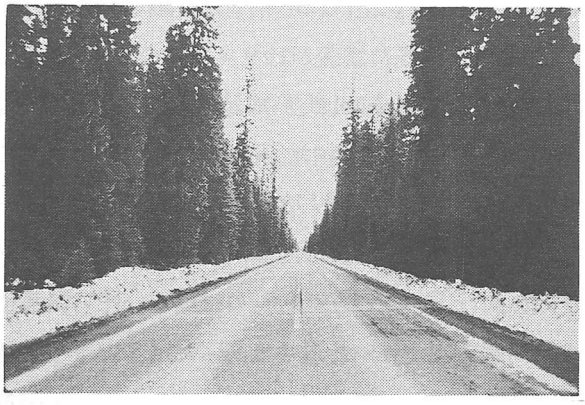
さて、数時間後、一行は目的地に到着した。ここは、広大な半乾燥の丘陵地帯であり、アメリカバイソン、アンテロープ、エルク、ホワイトテイルディアー、ミュールディアーなどが生息している。アメリカバイソンはイエローストーン国立公園から移入したものであり、今では、山の斜面を埋め尽す程個体数が多い。つまり、この保護区は、個体数の少なくなった有蹄類の遺伝子のストックを確保しておくために設けられたもので、巨大な種ウシ(？)牧場のようなものである。ところでアメリカでは、小麦、トウモロコシなどの重要な穀類は、あらゆる品種の種子が政府によって保存されている。この穀物政策に最も如実に示されているように、アメリカでは「遺伝子資源」の保存という概念が深く根づいているようだ。この遺伝子の保存という考えは、クマ類についても適用され、今回のクマ会議において、動物園はクマ類の遺伝子保存にとって重要であるとの指摘を受けた。（Workshop、アジアクマグループの章を参照）。この点に関しても、アメリカの自然保護の思想と日本のものとの違いが感じられた。

ミズーラに戻ると、J. Jonkel 氏が「ゴッドファーザー」というピザ屋さんに連れていってくれ、うまい（本当にうまかった）ピザをたらふく食った。この後、C. Jonkel 氏の教室

の大学院生のたまり場に行き、罐ビールを飲みながらスライド上映会を行った。

3月5日。この日は、グレイシャー国立公園の近くにあるフラッドヘッド湖周辺に案内してもらった。今回の案内人は、J. Jonkel氏も忙しいとのことで、C. Jonkel氏の教室の大学院生のHarry Carriles氏とLori Hudak氏であった。二人ともクマについて研究をしており、旅行中、ロッキー山脈にある彼らのフィールドを遠景だけだが見せていただいた。そこには、アメリカクロクマと若干のハイイログマが生息しているが、この2種は、うまい具合に棲み分けをしている。クロクマの冬眠穴は標高の低い森林地帯に、ハイイログマのはより高い標高の岩が露出しているところに多くある。そして、春から夏にかけて、クロクマは森林地帯で採食するが、ハイイログマは高山帯に移動してそこで採食する。ところが秋になり人里近くのリンゴ畑でリンゴが熟し始めると、2種のクマがそこでリンゴを食べるという。

そうこう説明を聞いているうちに、一行はフラッドヘッド湖についた。今まで走ってきたところは、ロッジポールマツなどのマツ類の林がよくみられたが、この周辺までくると標高が高くなるのであたりにはモミ、トウヒ、カラマツなどが占める林にとってかわっていた。そして道路は両側をこれらのうっそうとした大木で囲まれて、一直線に続いていた。この道を走ると、何か森の中へ吸い込まれていくように感じられた。



モミ・トウヒ林を走る道路。モンタナ州フラッドヘッド湖にて。

すばらしい旅が終り、ミズーラに戻ると、あたりはもうすっかり暗くなっていた。この日の夜は、近くのレストランで我々一行を歓迎するパーティーが開かれた。始め、C. Jonkel氏がホスト役となる予定であったのだが、出張のため出席できず、次いでモンタナ大学の副学長になるはずであったのだが、この方も急用がありキャンセル。回り回ってホスト役になったのは、日本人の奥さんを持つモンタナ大学の教授であった。また熊本大学と上智大学からの留学生2人も呼ばれていた。彼らは、「今日、日本からプロフェッサーが来てパーティーをするので出席するように」と言われたそうで、きちんとした身なりをしていた。ところが、我々が教授でも何でもなく、無礼講な恰好をしているのを見て、ほっとしたようであった。彼らは私と同世代の女性と男性で、すぐに打ちとけ、取り留めもない会話に熱中した。ちなみに、パーティーの費用は大学の公費で支払われるとのことだったので、私は、少々値の張るロブスターを頼んだ。実は、イセエビ（まあ似たようなものだ）を食ったのはこれが初めてであった。柔軟なモンタナ大学の予算に感謝！

やがて、青井、前田、太田の3氏が、夜行のバスでシアトルに向け発って行った。残った者でしばらくそのレストランで会食をした後、ホスト役の教授のお宅へお邪魔した。その家は小高い丘の上にあり、2階建てで地下室、バー付きのとても立派なお宅であった。そこで貧乏人根性の抜けない我々は、奥さんにこの家はいくらぐらいなのかと尋ねてみたところ、土地も含めて日本円で2千万円ぐらいとのことであった。さすがは住宅情況の良いアメリカだなと変なところで感心してしまった。

しばらくそこで会話をかわしたが、この日は平日であったので、そこそこに切り上げてお開きということにした。すると教授は立派な家にはふさわしくない青白い煙を吐き爆音を発する日本車で、我々をドミトリーまで送ってくれた。車に乗ってから気付いたのだが、大学の教授がやっているところをみると、アメリカでは飲酒運転は違法ではないらしい!?

3月6日。C. Jonkel氏が出張から戻ってこられた。彼はとても多忙な方で、帰るなり講義が待ちうけていた。という訳で、彼は講義をしなくてはならなかった。かといって、こんな我々でも、そのまま放り出していく訳にもいかなかったらしい。そこで彼は私に、講義でエゾヒグマについて何か話してくれないかと頼んだ。しかし、私は英語力に全く自信がなかったので返事を渋っていた。するとそこに羽澄氏がやってきて同じことを言われていたので、彼にヒグマのことも話してもらうことにした。（今から思えば、不完全な英語ながらも、私もやればよかったと悔んでいる）　講義室に入ると、既に講義が始まっており、Jonkel氏が我々を紹介した後、羽澄氏が教壇に立った。時々、Jonkel氏が補足しながら話が続き、学生も真剣に聞いていたが、講義終了のベルが鳴ると、話の途中にもかかわらず席を立ってしまった。アメリカ人は時間に厳しいのだ。講義が終ると羽澄夫妻は書籍の購入に行き、一方私はモンタナ大学の演習林を案内してもらうことになった。今回案内してくれたのは、シンディという学生であった。女性と2人だけの旅行ということだったので嬉しいやら緊張するやら、折からの語学力の欠乏も手伝って、何やらコミカルな道中であった（まともな会話は成立せず、まるで漫才のようであった）。一時間ぐらい車を走らせると、ルブレヒト演習林についた。二人が到着すると、東部産のナラ材で建てられた大きなログキャビンの中から初老の気の良さそうな男性が出迎えてくれた。ここには、彼を含めて数人の職員がいるのだが、この日は彼一人だけであった。人里離れているせいだろうか、彼は人なつっこそうに演習林の概要について説明してくれた。この演習林は約2万8千エーカー（1万1千haぐらい）の面積を持ち、構成樹種はマツ類が多い。年間の伐採量は10万feet^{3}で、その売り上げは2万から2万5千ドルぐらいだそうである。そして、日本の財産林的な大学演習林とは異なり、ここでは一般の人々に林を開放し、狩猟、キャンプ、スキーなどのレクリエーションが盛んに行なわれ、また牛の放牧も行なわれている。この演習林では、だいたいの見積りで10－20頭のクロクマが生息しているそうだが、人畜への被害は皆無に等しいということであっ

た。

この後ミズーラに戻ると、羽澄夫妻と共にJonkel氏にForestry science and Laboratoryに案内していただいた。ここは、国有林の研究所であり、モンタナ大学のすぐ隣にあった。ここの玄関先には、林業や動物に関する文献が積まれており、これらは全て無料で配布されているとあって、我々はほとんど全ての文献を頂戴した。研究結果の一般の人々への還元ということでは、アメリカは日本より一歩進んでいると感じた。私は、今回の渡米中、博物館等でも同じような経験をした。この背景には国民の税金でまかなっているのだから、無料で当然だという考えがあるようだ。また同時にこのようなことができるアメリカの財力についても感心した。

さて、この日の夜はJonkel氏宅でパーティーが持たれた。Jonkel氏は、自らも狩猟をやられ、しばしばシカを獲ってこられるそうだが、この日は、数日前にオオカミに襲われたエルクの肉を保存してあったので、エルクのステーキがメインディッシュとなった。私は、エルクとなると体が非常に大きいので、その分大味なのではないかと思っていたのだが、とんでもない、一口食べると、鮮烈でイヤ味のないうまみが舌を転っていった。エルクの肉は、牛のような脂身がほとんどなく、羽澄夫人に至ると「ダイエット・フード」などと称して、量を気にせず（失礼！）食されていた。あまりにおいしくて感激したのだが、それにも増して、エルクの肉が食べられたというのは貴重な体験であった。今度は是非ハイイログマの肉を食べてみたい。話が前後するが、パーティーの出席者は、Jonkel氏と院生のHarry Carriles氏、羽澄夫妻、ヨーコさんという日本人留学生と私であり、そして、途中からかつて北海道に住んでいたというBachelor夫妻が加わった。アメリカの家庭では、友人を自宅に呼んでの会食をよくやるそうで、日本のように、多くの場合外食で済ませるものよりは「まごころ」がこもっているように感じた。

3月7日。この日は、モンタナ滞在の最終日である。まず我々が訪れたのは、ミズーラにあるモンタナ州・釣り及び野生動物・国立公局（Montana Department of Fish, Wildlife and Parkes）の事務所であった。ここで、いろいろな出版物や資料をもらったり、狩猟についての話をうかがったりした。その時に聞いた話を簡単に紹介しよう。アメリカでは、狩猟のライセンス（免許証）は、狩猟税さえ払えば誰でも（旅行者でも）持つことができる。日本では、猟銃等の狩猟器具を所持することに対して許可を与え、結果として狩猟ができるのだが、アメリカの場合、個人が自由に銃器等を持てるので、狩猟そのものに対して許可を与えるのである。また、この支払った狩猟税は、全て鳥獣行政や研究に回され、このような事務所が運営されている。そして、ライセンス保持者は、ここで狩猟に必要な情報を自由に得ることができるのである。このようにアメリカでは、あちこちで税金をとられるのだが、同時に見返りとして納税者への還元がなされている。つまり、Give and Takeの精神の徹

底した受益者負担主義なのだ。

ところで、アメリカでは、狩猟や釣りについての管理は基本的に州ごとの鳥獣局で行っているが、毎年の捕獲量や、狩猟地域、休猟地域は、民間人から選出されたコミッショナーが決定する。つまり、西部劇でお馴染の保安官や陪審員制度の狩猟行政版というわけだ。Jonkel 氏は、このような民主制を取っていることを誇っているらしく、「イギリスの狩猟獣は国王のものだが、アメリカでは国民のものだ」と自慢気に言われた。この自慢話はいかにもアメリカ人的ですな。

我々が次に案内されたのが、とある郊外の廃虚であった。ここは何なのかと Jonkel 氏に尋ねると、第2次大戦中、ドイツ、イタリア軍の捕虜と日系人が収容されていた場所だと言う。そして、我々は奇妙な檻が設置してある部屋に連れて行かれた。とうとう焼きが回ったのだ！ 多忙な中無理に押しかけられ、Jonkel 氏は我々を強制収容する気になったらしい。と思ったが、どうやら私の勘違いだった。実は、現在そこはモンタナ大学が管理しており、果実園などを荒したクロクマが収容される場所だったのだ。まず、加害したクマがつかまえられ、檻に入れられる。次に檻の前に人が立つ。するとクマが人間を威嚇しようとする。その人は、すかさずトウガラシ液のスプレーやクラクションでクマを撃退する。この動作を繰り返しているうちに、クロクマは人間を見ただけですごすごと退散するようになる、というわけだ。そして、このクマは再び自然界に解き放たれても、もう畑を荒したりしないという。それでもまだ被害を及ぼすようであったら、遠くの地域へ移すか、殺すかするということであった。ところで、北海道のヒグマでこれと同じような方法をとったらどういうことになるであろうか。恐らくは、そんなことをしたらかえって人ずれグマを作ってしまい非常に危険であると、大部分の人がこれに反対するであろう。私もこれとまったく同じ方法をエゾヒグマに適用することには反対だ。しかし、クマ出没＝射殺といった単純な図式しか取り得ない日本の行政に対し（行政のみを批判しているのではない）、モンタナのこの方法は、真の意味での有害鳥獣駆除対策に何らかのヒントを与えてくれそうな気がした。

さて、モンタナの旅もそろそろ終りに近づいた。この後、羽澄氏夫妻は、ミズーラの空港からハワイへの旅に飛び立って行った。一人残った私も、グレイハウンドのバス・ディーポに送ってもらいミズーラを離れた。そしてデンバーへと向うバスの中で、Jonkel 氏を初めいろいろと親切にして下さった人々のことを思い浮べ、ミズーラをなごり惜しみつつも、これから始まる1人旅に胸が高まるのであった。